

昭和初期における蔵の保存と活用

—恩賜郷倉を対象として—

Conservation and Utilization of the Storehouses in the Early Showa Era
: Focus on Imperially Bestowed Village Storehouses

山本雄
YAMAMOTO Yu

1. はじめに

(1) 研究背景

現在、日本の文化財をとりまく課題の一つに、近代化遺産の保存と活用がある。近代化遺産は、その評価の方向性が定まらず、認知されないまま消失している現状がある。また、近代化遺産と同様、保存と活用が難しい対象として負の遺産がある。負の遺産は、歴史のなかで悲劇的な記憶を持つ遺産であり、例として、震災遺構や戦争遺跡が該当する。これらの文化財は扱い方が検討途上であり、未だ難しい課題となっている。本研究で対象としている恩賜郷倉は、昭和時代に建造された建築物であり、冷害を発端としていることから、負の遺産の側面も有する。

(2) 研究目的

本研究では、近代化遺産と、負の遺産の両方の側面を有する恩賜郷倉を対象とし、文化財の保存と活用の意義を考察することを目的とする。

これまで行われてきた恩賜郷倉の研究には、建築学的手法による建築物の「標準」を考察したものや、歴史学的手法により恩賜郷倉の歴史的意義の考察したものが存在する。しかし、特定地域を対象とした断片的なものに留まっており、未だ網羅的な研究は行われていない。本研究では、既往研究において対象地であった岩手県以外の、青森県・秋田県・岩手県・山形県・宮城県・福島県等を含む網羅的な情報を踏まえて、恩賜郷倉の基礎設計に携わった今和次郎の建築思想及び手法から、建築物の価値を考察した。これらの内容は、恩賜郷倉の保存を考える上で必要な基礎情報である。

(3) 研究の方法

本研究では、一次史料として『郷倉奨励建設計画概要』、『宮城県郷倉誌』、『既設郷倉に関する調査(個票)』及び二次史料として東北地方の自治体で編纂された郷土史等を用いて、恩賜郷倉の基礎情報の収集を行った。また、現存する恩賜郷倉一棟(熊谷家住宅板倉、宮城県に所在)の現地調査を行い、構造及び利用状況を確認した。収集した情報をもとに、現存する恩賜郷倉のリスト化した。そのうち、保存する恩賜郷倉の評価を行い、適切な保存と活用はどうあるべきかを考察する。

2. 恩賜郷倉の概況

(1) 郷倉について

郷倉は、凶作用に粳や米を貯蔵するための蔵である。歴史的には義倉に分類され、古代中国から伝搬した。江戸時代では全国的に運用されていたが、近代以降は貨幣制度の発達に伴って衰退していった。

(2) 東北大凶作

1934年、大規模な冷害が東北農村一帯を襲った。昭和時代、東北農村は昭和恐慌によって疲弊しているなかでの冷害であった。その要因はオホーツク海付近の高気圧が晩夏に至るまで居座ったからである¹⁾。東北農村の悲惨な窮状が連日報道され、政府としても目下の対策を迫られた。その結果、当時の内務省は、昭和天皇からの御下賜金50万円と国費をあわせて、郷倉を東北農村に建造することを決定した。

青森県・秋田県・岩手県・山形県・宮城県・福島県の大字数、農家戸数、冷害による5割以上の農家戸数、既設郷倉数、各県の設置希望数をもとに、御下賜金及び国費の配当額が決められた。その結果、岩手県の建設棟数が最も多く、次いで福島県、山形県、宮城県、秋田県、青森県と続く。

3. 今和次郎と恩賜郷倉

(1) 今和次郎の活動とその源流

考現学や生活学の創始者であり、建築学及び民家研究で知られる。大学で講義を受け持つ傍ら、自身の知見を活かし、人々の生活改善運動を行う。

今和次郎の建築作品は、「装飾」や「意匠」を大事にしており、それは1923年のバラック装飾社の出来事が大きなきっかけとなっている。

(2) 郷倉と今和次郎

農林省から委託を受けた今和次郎は、恩賜郷倉以前の郷倉を調査するために出かけた。調査したのは、3棟の郷倉である。今和次郎は、調査した郷倉のうち、青森県北津軽郡七和村の持子沢郷倉を最も高く評価した。持子沢郷倉は、柱と柱の間に横板を嵌め込む構造であり、恩賜郷倉も同様の造りをしている。したがって今和次郎は、持子沢郷倉を参考に、恩賜郷倉を設計したと考えられる。

一方、恩賜郷倉は装飾や意匠の面で特徴的である他、近代的工法が使用されている点で相違がある。具体的には、恩賜郷倉には火打ち、基礎コンクリート束石、筋交い、亜鉛鉄板が使用されている。

4. 恩賜郷倉の建築的特徴

(1) 郷倉の建築デザイン

恩賜郷倉は東北地方各県ごとに、その意匠や装飾が異なる。岩手県は、両妻側に楕形の板を張っている。山形県は、下見板に換気窓が連なっている。宮城県は、換気窓に菊花紋章の金具の他、土台に装飾付き補強金物を使用している。福島県は、外観こそ岩手県の恩賜郷倉に酷似しているものの、下屋が切妻型になっている。

(2) 恩賜郷倉の現存棟数

恩賜郷倉の現存棟数を調査した結果、現在（2022年2月時点）で35棟は現存していることが判明した。これは筆者が、文献やインターネットを利用して確認した数であるため、35棟以外にも恩賜郷倉が存在する可能性があることは否定できない。

(3) 特定郷倉の分析

恩賜郷倉のなかで、唯一の国登録有形文化財になっているのが「熊谷家住宅板倉」である。所有者の変遷は、戦後は農協用倉庫として使用された後、個人所有となり現在に至る。宮城県の恩賜郷倉の建築デザインの特徴として、両妻側の換気窓に天皇に関わる菊花紋章の金具が付属する。所有者から、その金具だけを欲する人もいたという話を聞いた。現在は物置として使用されており、典型的な蔵となっている。



図 熊谷家住宅板倉の外観

5. 蔵の保存と活用

(1) 恩賜郷倉の保存

蔵の再生方法は、「現地再生」と「移築再生」の2種類に大別される²⁾。また、再生後の活用によっても方針が変わってくる。恩賜郷倉を再生する際の前提として、その「装飾」と「意匠」を残して再生する。また、歴史的な文脈を意識して、遠方への移築再生は避けなければならない。具体的には、所在する県を越えた移築は避けるべきである。

(2) 恩賜郷倉の活用

活用に関しては、蔵の性質上、所有者の希望によって自由な用途で 사용할ことが可能である。かつて宮城県亶理町に位置していた磯恩賜郷倉のように、建物の内外にパネルを置くことによって、地域住民に東北大凶作の歴史を伝える文化財として機能する。

本研究では、現存する35棟の恩賜郷倉のうち、12棟を再生可能だと評価した。評価の方法は「壁及び屋根に、内部が見える程の損傷を受けている」「大幅な改修を行っており、蔵の保存状態がわからない、または著しく形を留めていない」「工事が不可能（部材を分解できるか否か）」の3点に該当しないものを選別した。これらの恩賜郷倉を調査した後、民家バンク等のウェブサイトに登録し、保存と活用を図る。

6. 結論

恩賜郷倉の利用における意義は、負の遺産においては、冷害に対する災害の知恵を継承していくことであり、悲惨な記憶だけではない。近代化遺産においては、近代工業の発展のなかで、政府が地域の慣習を再評価し、新しい技術を合わせたことを知ることにある。災害の多い我が国において、歴史的な知恵を振り返り、現代に活かす工夫を教えてくれる貴重な文化財である。

参考文献

- 1) 一戸富士雄(2018)『国家に翻弄された戦時体制下の東北振興政策—軍需品生産基地化への変貌—』文理閣
- 2) 日本民家再生協会(2012)『よみがえる蔵—全国再生事例44選—』丸善出版

Abstract

This research aims to discuss conservation and utilization of Imperially Bestowed Village Storehouses which are both modern heritage and negative legacy. The warehouses were basically designed by Kon Wajiro. His works characterized by “design” and “ornament”. In addition, modern construction methods were used for the warehouses. The warehouses may need to be renovated as they would be demolished due to ignorance. There are currently 35 remaining warehouses in the Tohoku region. And, one of them in Miyagi prefecture - registered tangible cultural properties - was actually investigated. In this research, 12 of them were judged to be renewable.